

# 松永久秀被官に関する一考察

——山口秀勝を中心に——

中 川 貴 皓

## はじめに

一般的に松永久秀と言えば、下剋上の申し子であり、戦国時代を象徴するようなイメージでよく語られる。しかし、そのもともなった逸話は、江戸時代に形成されたものであり、久秀の実態とは、かなりかけ離れている。ただ留意したいのは、久秀が当時の武士のあり方とは異なる経歴を持つということだ。彼は先祖伝来の所領・経済的基盤・人的関係を持たず、己の才覚で「大名」にまで登りつめた人物なのである。そのため、出自はわからず、まさしく戦国の世を体現したかのような実力者という従来の評価の一部分は、あながち間違っているとは言えない。

いくら久秀が類まれなる実力者とはいえども、一人で伸

し上がるには限界がある。久秀を支えた被官の功績を抜きに語ることはいらないだろう。久秀という戦国期においてもイレギュラーな新興勢力を支えた被官とは、どのような存在であつたのであろうか。それを考えることは、戦国期特有の社会構造を解き明かすきっかけとなるかもしれない。まずは松永氏に関する研究を簡潔に整理しておこう。

はじめは三好氏被官<sup>①</sup>、ついで足利義輝政権を支える幕臣<sup>②</sup>、最終的には永禄十一年（一五六八）以降、足利義昭政権を支える有力諸大名の一人として、天文・永禄・元龜年間の畿内近国の政局に多大な影響を与えた松永氏に関する研究は、従来、久秀個人の権力動向や位置付けに主眼が置かれる一方で<sup>③</sup>、一門や被官構成・地域支配に関してはほとんど着目されてこなかった。しかし、近年、被官のなかでも中

心的存在であつた竹内秀勝<sup>5</sup>、久秀に近侍し大和国多聞城に在城した楠正虎・結城忠正をはじめとする側近衆<sup>6</sup>といった中枢部の被官を対象とした考察や松永氏の有力な支城である摂津国滝山城に在城する被官に関する考察<sup>7</sup>など、松永氏被官に関する研究が徐々に増加しており、基礎的なデータが蓄積されつつある。また以前、筆者は松永氏の中心的な拠点城郭である信貴城を論じた際に「信貴城衆」の存在や久秀被官の「下代」について触れ、若干の分析を試みた<sup>8</sup>。

このように松永氏被官に関する研究は、全体的に、または部分的により深くに論ずることが求められる段階に達している。そこで本稿では、信貴城衆である山口秀勝を分析対象として検討を加えたい。秀勝はあまり著名ではないものの、松永氏被官においては、少ないながら比較的史料に恵まれている一人であり、そのため動向を把握しやすい。彼の動向や役割を明確にすることは、被官におけるひとつのモデルケースとなり、他の被官との比較対象としても今後有用である。それらは研究に深みを持たせることができるだろう。以上のように松永氏の家中構造や地域支配、さらには戦国期特有の新興勢力による主従制の有り方をあきらかにするための一試論としたい。

また、あわせて松永氏被官発給文書目録を添付した。力不足により全体像を把握することはできないが、概要は見てとれるだろう。本目録は作成途中であり、不備も多々あると思われる。また精査により今後増加することは間違いないが、中間報告を兼ねて、今後の戦国期畿内政治史研究の一助となれば幸いである。

## 一 古記録からみた山口秀勝

本論に入る前に、まず、山口秀勝の出自に関して少し触れたい。関連史料は、管見の限り確認できず、生い立ちはいずれかでない。さらに大和国においては山口姓を持つ有力な領主は確認できず<sup>9</sup>、後述するように秀勝の活動時期が永祿後期から元亀年間に限られることを踏まえると、松永久秀の大和国侵攻に付き随った他国衆であることが推測される。松永氏の被官は、京都近郊に基盤を持つものが多い<sup>10</sup>ため、秀勝もその一人と考えられる。そこで、「山口」という姓と諱の「秀勝」に注目すると、山城国綴喜郡宇治田原の土豪である山口甚介秀景が該当する。秀景は当初、「根本葉室内」とあり、公家葉室家の侍であつたが、のちに足

利義昭政権の「武家之御足輕」として將軍に奉公するようになる。<sup>(11)</sup> 秀勝は、彼の一族である可能性が高いといえよう。

## (二) 松永氏麾下の「大将」として

古記録における山口秀勝とみられる人物（以下、山口氏と記す<sup>(12)</sup>）の初見は、永祿十年（一五六七）である。三好・松永氏による將軍義輝殺害を発端とした畿内政局の混乱は、ついには足利義榮を擁立した三好三人衆方と松永久秀方に内部分裂を起こして乱雑を極めた。松永方には三好家当主の義継も与し、松永久秀は足利義昭を戴き、同じく義昭を推戴する織田信長と通じて難局の打開を計った<sup>(13)</sup>。その最中、『多聞院日記』十月廿一日条によると「飯盛城松山安芸守井山口以下在之、堺へ離了、城ハ篠原・三好日向守請取入了」と記されているように、山口氏は松永方の代表的人物として松山安芸守とともに河内国飯盛城を守備していたが、三人衆方に城を明け渡して堺に逃れている。飯盛城は、かつて三好長慶の居城として摂津国芥川城と並ぶ三好氏の本拠の一つであり、<sup>(14)</sup> 当時は松永方の最前線であった。そのような重要な拠点の守備を山口氏は任されていたのである。

以降、山口氏は松永氏麾下の大将として、各地の軍事行動に参陣する。元龜二年（一五七二）八月四日には、大和国辰市城における松永久秀と筒井順慶の攻防戦に登場する。当日の合戦の様子や松永方の被害は、「尋憲記」や『多聞院日記』に詳しいので、次に引用したい。

### 【史料一・a】「尋憲記」（『大日本史料』十之六）

元龜二年八月四日条

一、巳刻ニ城州、<sup>（松永久秀）</sup>左京大夫衆ヲツレ、人数千三百計

まで、大安寺へ付候、<sup>（松永久通）</sup>右衛門佐も大安寺へ参候、

申刻ニ辰市ニ筒井より城ヲ昨日仕候、其城へ取懸、

<sup>（攻め戦う）</sup>セメタ、カウ事数刻也、城へ乗候衆寄衆不殘乗候、

<sup>（堀）</sup>ヘイモ悉引落、堀ハ人ニテムマリ、<sup>（埋まり）</sup>手ライ不知数、

郡山より<sup>（後巻き）</sup>後マキ仕、二度ハツキ立候、三度メニコ

口乱、散々成由也、

打死衆四出井紹二、山崎久助、戸井田、山田太郎

右衛門、野間、川邊伊豆、安邊、渡邊兵衛大輔、

松岡左近、菓林院、立入左馬大夫、松永久三郎、

半竹藤市兄弟<sup>二人</sup>、クホ子、楠御合永戸、ワニ吉丞、

瀧久大夫、福智一承、竹田対馬、織部、赤澤内蔵

介、竹田兵衛丞、河州左京大夫衆馬三十三人打死、木藏、佐久間、(原本コノ間約行ノ空間アリ) 其外雜兵以上二百七人余首有之由也、付城も山口持城一ツ、屋及持城一ツ、田ナカ之城一ツ、高田城一ツ、犬臥城一ツ、以上五ツアケ了、

【史料一・b】『多聞院日記』(増補統史料大成)

元龜二年八月五日条

手負之衆竹下<sup>ウスデ</sup>・山口・古市兄弟・太曲・柳生息以下、竹内下総之内ニハ手負ハサルハ馬上ニ三人ナラテハ無之、余悉手負了ト、

右の史料にみられる合戦は、筒井順慶が国中<sup>15</sup>に橋頭保として築いた辰市付城を占拠すべく、松永久秀・久通父子が信貴・多聞両城から攻め込んだことが発端であり、付城を救援しようとした順慶による「後マキ」が行われた、いわゆる後詰め決戦であった。壮絶な戦いの結果、松永方は一族・重臣をはじめ多数が討死・負傷し、周辺に維持していた五つの付城を明け渡す大敗北を喫した。山口氏は、付城の一つを守備する一部隊の大将として参陣し、戦いで負傷するなど、前回同様、最前線での活躍を見せている。

元龜三年(一五七二)四月には、松永父子・三好義継の連合軍による畠山方安見新七郎の籠る河内国交野城攻めに従軍しており、「松永彈正取出を申付け候、其時の大将として、山口六郎四郎・奥田三川両人、勢衆三百ばかり取出に在城なり<sup>16</sup>」とみられるように久秀の命を受けて付城を築き、大将として奥田忠高とともに三百人の軍勢を率いて在城した。この際、織田信長の交野城への後詰により、「取出を取巻き、し、垣結まはし置かれ候<sup>17</sup>」という窮地に陥るが、風雨に紛れて切り抜け、大和国まで無事に退いた。山口氏は、この交野城攻めにおいても大将として最前線を戦い抜いている。

以上のように、山口氏は、松永氏の重要な戦いに一部隊の大将として参陣しており、常に戦いの最前線で軍勢の指揮を執っていた猛将であった。まさしく歴戦の将であり、松永氏被官のなかでも有数の武刃者であると評価できよう。

## (二) 知行地と内衆の存在

古記録から読み取れるのは、山口氏の武刃ばかりではない。山口氏の得た知行地やその様相、及び山口氏被官に関

しても断片的ながら確認できる。

【史料二】『多聞院日記』（増補統史料大成）

永禄十二年九月七日条

一、福住ノ跡闕所二山口知行二付、妙喜院闕所坊ノ道具以下請取了、内々競望ノ仁寺僧衆ニ有之歟、追日凶事寺社此度果了、扱弥如何可成行哉覽、消肝者也、

【史料二】には、興福寺の妙喜院が闕所地の坊に残されていた諸道具を受け取った旨が記されているが、山口氏に關する事柄にも触れている。それによると山口氏は、永禄十二年（一五六九）九月以前に「福住ノ跡闕所」を知行地として与えられていることがわかる。

この「福住」とは、大和国春日社散在神人の国民である福住氏のことを指し、筒井氏とは縁戚關係にあった。当時の惣領である紀伊守宗職は、筒井順慶の後見人を務めるほどの有力な国人領主であり、奈良盆地東側に広がる高原地帯、いわゆる東山内と呼ばれる地域を中心部西側に所在する福住郷を本拠とし、福住城に居住した。福住氏は応仁の

乱以降、この場所にしばしば筒井氏を迎えて兵站基地を提供しており、筒井氏の後背地として機能した重要な地域である。【図1】

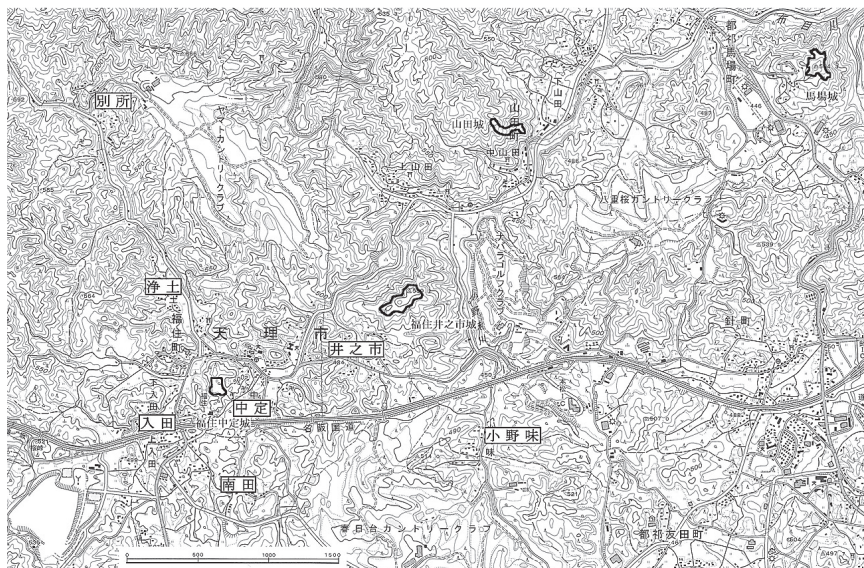
永禄十一年（一五六八）十月、五畿内一統を成し遂げた足利義昭より大和国の進退を松永久秀が任されるようになると、順慶は没落し、福住氏も在地から追われたようである。その闕所地をそのまま山口氏が引き継いだ。闕所地の詳細は定かでないが、福住氏の様相を踏まえると福住七郷を中心とした大規模な領地であることが想定される。このような論功行賞からは、それまでの山口氏の働きぶりや久秀から山口氏への信賴と期待が垣間見える。

【史料三】『多聞院日記』（増補統史料大成）

元亀元年六月六日条

一、松城父子南へ陳立、何方へか不知之、四打迄井戸邊ニ在陳、各々不審之處、十市城ノ内ニ菅原調略筈之處不成間、則菅原ハ柳本ニ離了、無歸陳、父子共ニ福住城へ取寄了、散郷ハ無亂妨、給人山口へ前ヨリ相隨故也、以上四千ほと在之云々、内にも五・六百モ在之歟、伊賀衆數多入云々、





【図1】福住郷（福住七郷）と城館の分布  
（国土地理院 1/25000 地形図「大和白石」による）

右の史料からは、山口氏支配期の福住郷地下人の動向や山口氏の動員兵力がよくわかる。福住郷は、先述の通り、永禄十二年九月以前から山口氏の知行地であった。翌元亀元年（一五七〇）六月になると、没落していた筒井方の活動により、東山内一帯に軍事的緊張状態が生まれたようである。そのため、松永父子が四千の軍勢を引き連れ、福住城に近寄った。その際、陣取りに関するであろうか。松永氏は、「散郷」の地下人らが以前から山口氏方に従っていることを認め、「散郷」における兵士の乱妨行為を禁ずると対応した。ちなみにこの「散郷」とは、福住郷を構成する七つの郷を示すと考えられる。【史料三】を読む限り、散郷の地下人らは常日頃から山口氏方に対して従順であり、山口氏による在地支配は安定したものであったことが窺える。

また「内にも五・六百在之歟」とあり、福住城内には五・六百人の軍勢が詰めていたようだ。この福住城は、福住中定城と福住井之市城のどちらを指すのかは定かではないが、この五・六百人のなかには、伊賀衆も多く含まれていた。これらの軍勢は、山口氏単独の動員兵力であることを指摘できる。松永父子本隊の四千人と合わせて、松永方は

四千六百の軍勢であり、その内の十三%を山口氏の部隊が占めていた。

次は山口氏被官に関する史料である。

【史料四】『多聞院日記』（増補続史料大成）

元龜二年八月二日条

一、瓦カマニテ山口カヲキヲ内衆兩人シテ生害了、野

田ノ称宜所へ逃入候間、則兩人取ツメ腹切由了、

右の史料によると、南都の瓦窯において山口氏の甥を内衆が殺害し、野田称宜所へ逃げ込むものの、何者かが問責し、切腹させたという。関連史料は見当たらず、本史料のみでは、どのような経緯で事件が起こり、内衆を追いつめたのは誰なのか、など詳細をあきらかにすることはできないが、ここで注目したいのは、山口氏に甥や内衆が存在し、事件が南都で発生したことである。本史料により、山口氏は独自の家臣団を組織し、久秀に奉公していたことが読み取れる。また一部の門や内衆は、南都に居住していたようだ。多聞城に詰めていたのであろうか。

以上、古記録に確認される山口氏関連記事を検討してき

た。ここまでの結果を簡潔に整理したい。

①古記録より確認できる山口氏の活動期間は、永禄十年（一五六七）から元龜三年（一五七二）までの六年間。

②松永氏麾下の大將として各地の軍事行動に参陣し、前線で活躍する。

③永禄十二年（一五六九）九月以前に松永久秀より福住氏の闕所を知行地として宛がわれる。

④独自の家臣団を組織し、久秀に奉公する。

## 二 山口秀勝発給文書の検討

秀勝の発給文書は、全て法隆寺に所蔵されており、五通現存する。『昭和資財帳八 法隆寺の至宝―古記録・古文書』<sup>18</sup>には、文書の写真が掲載されているものの、未だ翻刻はされず、管見の限り、論文においても使用されていない。そのため、紹介も兼ねて本章において全て掲載し、検討を加えていきたい。

秀勝の発給文書は二種類に大別される。私的な人的交流に伴う文書と公的な実務に伴う文書である。まずは、私的な性格を有する文書から確認しよう。

【史料五】 山口秀勝書状（永禄四～天正五年）

〔法隆寺文書〕『法隆寺の至宝』八 二函二二六

旧冬者歳暮為御札青銅貳十疋送賜候、嘉悦之至候、猶岡大可被申候条不能詳候、恐々謹言、

山口

正月十一日 秀勝（花押）

法隆寺

年会

参御返報

【史料六】 山口秀勝書状（永禄四～天正四年）

〔法隆寺文書〕『法隆寺の至宝』八 二函二二九

御折紙令拝見候、仍而為御見舞預り音信如御状相届申候、御懇志之段本望存候、恐々謹言、

十月廿三日 秀（花押）

年会  
参御返報

【史料五】は、法隆寺年預宛てであり、秀勝の送った歳暮の御札として、年預から錢二十疋を贈与されたことに對する返札である。文書の伝達には「岡大」が携わり、本状

とともに添状が発給されていたようである。後述するが、「岡大」とは、岡大介勝家のことを指す。彼に関しては次章において詳しく述べたい。

後者の【史料六】も前者同様、宛所は法隆寺年預である。内容は、年預よりもたらされたお見舞状の返札である。ここで確認したいのは、書札礼である。差出書は「秀」の一字と花押であり、宛所は法隆寺を付けず、「年会」と省略する。書札礼において薄礼であることは否めない。しかし、他の秀勝書状や本状が極めてプライベートな内容であることを踏まえると、この薄礼は、相手を格下と見做したわけではなく、相手との関係の深さを示すものと解釈できないだろうか。

これらの史料から、見舞や年中行事である歳暮の贈答など、秀勝と法隆寺年預のあいだには個人的な関係が構築されており、日常的な音信・贈答による人間関係の再確認がおこなわれていたことがわかる。

次は公的な実務に関する書状を見てみよう。

【史料七】 山口秀勝書状（永禄四～天正五年）

〔法隆寺文書〕『法隆寺の至宝』八 二函二二七



尚々此方御用之儀候者可被仰越候、如在申間敷候、  
此外不申候、

今度当寺十穀坊就倉之義<sup>二</sup>御理申候處御用捨之段外聞  
之本望存候、就其十穀房其方<sup>へ</sup>被越候之間可然様<sup>二</sup>可  
有御入魂候、彼藏之内米之粒候ハハ御覽にて可示賜候、  
則久秀<sup>江</sup>可申遣候、様躰十穀坊<sup>へ</sup>、態々申入候間如何由  
候哉、恐々謹言、

山口

卯月十四日 秀勝（花押）

法隆寺

沙汰衆中

法隆寺内の十穀坊の「倉」に関する史料である。詳細は  
定かでないが、秀勝より「倉」の件について、「御理」を  
申したところ、「御用捨」の返事をもらい満足であるとし、  
就いては十穀坊を派遣するので入魂すること、藏に米粒が  
あれば久秀に取次ぐので秀勝まで連絡すること、を述べて  
いる。

本件に関して、これ以上は久秀への取次ぎを言明してい  
ることから、秀勝の裁量を超える案件については、秀勝が

直接久秀へ取次ぐというシステムになっていたようであ  
る。重要事項は、最終的に久秀が決定を下すという松永氏  
家中における久秀への集権制を指摘できる。

【史料八】山口秀勝書状（永禄四年～天正五年）

〔法隆寺文書〕『法隆寺の至宝』八 二函二一八）

御折紙令披見候、仍神南百姓共在所<sup>へ</sup>取帰申之由尤<sup>二</sup>  
存候、今度何とて百姓共逃散申候哉、猶向後も当方之  
義別義有間敷候間、可御心易候、在所<sup>二</sup>人就無之不知  
者契仕様<sup>二</sup>候、此以後者逃散致さぬよう<sup>二</sup>可被仰付事  
肝要候、堅人夫之儀可承候、従何方出候へ与由候哉、  
様躰具可示賜候、恐々謹言、

山口

卯月十五日 秀勝（花押）

法隆寺

年会衆中

御返報

【史料八】は、神南の百姓逃散の件に関して詳しく記さ  
れている。神南庄は法隆寺の南西、三室山周辺に位置し、

当時は法隆寺領であった。【図2】

本状は、法隆寺年預への返状で、百姓が在所へ戻ったことを「尤」とし、逸散の理由が判明しないことに疑問を抱きながらも、今後も松永方には差し支えないので安心すること、神南の在所に人がいないため、「不知者」が契るようになること、これ以後は逸散しないように言い付けることが大事であると述べている。また上記以外に人夫の派遣を承認している。人夫はどこから出すべきか伺っており、返信を求めている。

情報が断片的ではつきりしないが、法隆寺側は、百姓逸散により松永方に迷惑を掛けることを恐れ、秀勝へ状況を報告した。そして、秀勝は今後の対応について指示するなど、法隆寺の在地支配に間接的に関与していることがわかる。すなわち法隆寺にとって、当寺領の問題であっても、信貴在城の秀勝を疎かにすることができなかったのである。地域における松永氏の影響力の大きさが窺える史料でもある。



【図2】平群谷の様相と城館分布（『明治前期 関西地誌図集成』  
所収 明治17～23年仮製図「信貴山」による）

【史料九】 信貴在城衆秀勝書狀（永祿四〇十一年）

〔法隆寺文書〕『法隆寺の至宝』八 ハ函三一六

自霜台御狀持賜候、令拝見候、仍御門前濫妨・狼藉無之様ニ可申付候由、心意申候、当城之義、無別義様ニ可申聞之条、可御心易候、恐々謹言、

信貴在城衆

五月三日 秀勝（花押）

法隆寺

年會御坊

御返報

【史料十】 岡勝家書狀（永祿四〇十一年）

〔法隆寺文書〕『法隆寺の至宝』八 二函一五三

從霜台之書狀并貴寺御折昏致披露候、則御報被申候、何も御門前之義少も如在有間敷由候、可御心易候、尚御用候ハ、可蒙仰候、恐惶謹言、

岡大介

卯月三日 勝家（花押）

法隆寺年會

右の史料【史料九】・【史料十】は、一カ月のタイムラグが気にかかるものの、同一内容であるため、関連文書と推測される。ちなみに【史料十】は秀勝書狀ではなく、岡大介勝家の書狀である。

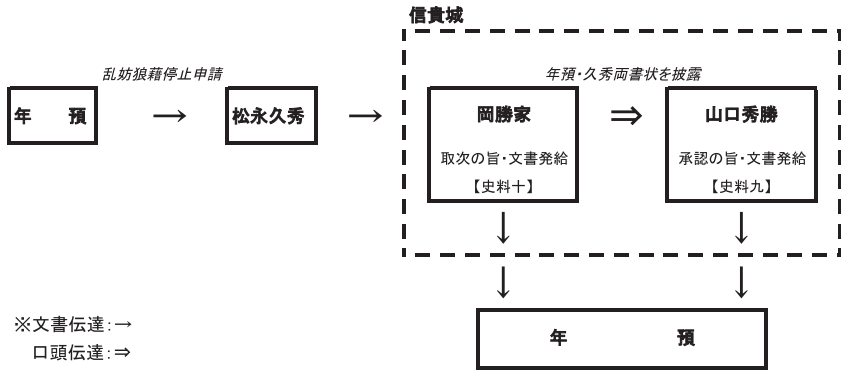
【史料九】は、差出書に「秀勝」の肩書として、「信貴在城衆」と記す。内容は、法隆寺門前における濫妨狼藉の禁止依頼を承認したものであり、禁制に近い。史料には記されていないが、法隆寺門前において信貴在城衆と民衆のあいだで軋轢が生じたらしい。法隆寺年預の書狀は、「霜台」、すなわち松永久秀を通じて秀勝にもたらされており、秀勝はそれを確認したうえで承認し、本狀を發給している。史料中において「当城之義、無別義様ニ可申聞」と述べていることから、秀勝は、信貴在城衆に対して軍事指揮権を保持していることが窺える。また松永氏家中においては、禁制（禁制に近い内容の書狀も含む）の發給者は、久秀と嫡子久通に限られていた。禁制發給という面では、秀勝は松永父子に次ぐ位置にいたのである。

【史料十】は、先述のとおり岡勝家の書狀である。勝家は年預に対し、久秀と年預の両書狀がある人物に披露したこと、及びある人物からの「何も御門前之義少も如在有間

敷」との言葉を伝えていた。勝家が取次いだ相手は、【史料九】や【史料五】を踏まえると山口秀勝で間違いだろう。勝家は秀勝の取次ぎとして行動し、実務補助を担っていた。

さて、あらためて法隆寺門前案件を時系列順に整理しておこう。【図3】

【図3】法隆寺門前案件に関する動向



②松永久秀は山口秀勝に対し、自らの書状と年預の書状を送る。

③岡勝家は両書状を受け取り、秀勝に披露。

④勝家、取次いだ旨の書状を年預に発給。【史料十】

⑤秀勝、承認の旨の書状を年預に発給【史料九】

以上、秀勝発給文書に検討を加えてきた。発給文書の宛先を見る限り、秀勝は法隆寺との対外交渉を主として担当していたことが読み取れる。【史料八】の神南庄百姓逃散の案件などを踏まえると知行地である福住から法隆寺と交渉していたとは考え難く、【史料九】にも記されるように信貴城に在城して政務を担っていたと考えられる。

### 三 岡勝家の位置付け

山口秀勝関連文書に登場する岡大介勝家とは如何なる人物であろうか。彼の出自はあきらか度なく、手掛かりは「岡」という姓のみである。大和国衆に岡氏という有力な在地領主はいるが、勝家との積極的な繋がりは見出せない。古記録や軍記物にも記されず、来歴の謎めく人物である。本章では、彼の発給文書を軸に勝家の位置付けを検討したい。

【史料五】は秀勝の発給文書であるが、「猶岡大可被申候

条不能詳候」とみられるように、岡勝家は秀勝書状の伝達を担い、添状を発給している。先述の通り、本状は、法隆寺年預への御札であり、秀勝個人の人的交流を示すものであるため、極めて私的な書状と言える。また【史料十】では、法隆寺門前問題の取次ぎを担い、久秀・法隆寺年預の両書状を披露するなど、秀勝の実務補助を行っていた。こちらは前者と比べると公的な内容の書状である。以上のことを踏まえると、勝家は秀勝被官として公私ともに活動していると解釈できよう。すなわち松永久秀の陪臣となる。なお推測に留まるが、勝家の「勝」は秀勝からの偏諱授与によるものであるかもしれない。

さて、勝家の発給文書は他に二通存在する。順に確認して勝家の動向を探りたい。

【史料十一】岡勝家書状（永禄十一年）

〔法隆寺文書〕『法隆寺の至宝』八 二函一五五

典厩御登城之義、于時為御札御折帋<sup>并</sup>五十疋御進献被成候、則披露申候、従我等相心得可申旨候、然者私へ

貳十疋被下候、御氣遣畏入存候、恐々謹言、

岡大

五月廿一日 勝家（花押）

法隆寺年会御報

右の史料によると、勝家は、「典厩」すなわち細川藤賢の「御登城」の際に法隆寺年預より依頼された進物の披露を藤賢の面前で行っている。「御登城」とは、信貴入城のことであろう。藤賢は、永禄十一年（一五六八）六月に松永方として信貴城に在城しており、三好三人衆を相手に籠城戦を展開するが、同月二九日の和議によって城を明け渡し、大坂へ退去した<sup>19</sup>。よって本史料は永禄十一年に発給されたものと考えられる。次いで【史料十二】を見てみよう。

【史料十二】岡勝家書状（永禄三／天正四年）

〔法隆寺文書〕『法隆寺の至宝』八 二函一五六

今月廿五日<sup>二</sup>貳貫文、今日貳貫文、先度に十四貫文、以上合当年中に十八貫文分済申候、相残明春者早々御登可有候、かしく、

岡大介

十二月晦日 勝家（花押）



## 法年御坊

### 参御同宿中

これは債務の事務処理に関する書状である。債務総額は定かではないが、松永氏が信貴城衆を經由して法隆寺より金銭を借り、分割で返済を行っていることが読み取れる。借金残りは、明春に「御登可有」と記されており、金銭のやり取りは信貴城内で実施されていたようだ。勝家が信貴城の財政管理実務に深く携わっていたことが窺える。

以上、少ないながらも岡勝家発給文書を確認した。ここでも古文書学的観点から秀勝発給文書と比較してみたい。年代は少し遡るが、ほぼ同時代史料と言ってよい「細川家書札<sup>(20)</sup>」や松永久通が大館晴光に所望した「大館流書札<sup>(21)</sup>」と同内容の写本「大館常興書札抄<sup>(22)</sup>」を参考に書札札の面から検討しよう。両者の発給文書は宛先が同一であるため、比較しやすい。上記の書札札を軸に比較すると、勝家と秀勝のあいだには家格の差があったようだ。具体的に確認したい。

勝家書状は、宛所の法隆寺に対して、書き止め文言に「恐惶謹言<sup>(23)</sup>」を使用することがあり、また宛所の位置も月日よ

りも上に記されることが多く、さらに脇付に「御返報」より上位である「御報<sup>(24)</sup>」や「参御同宿中<sup>(25)</sup>」の文言が使用される。一方で、秀勝書状は書き止め文言を全て「恐々謹言」とし、宛所の位置を月日と揃え、脇付は「御返報」とする。また【史料六】では差出書を「秀」の一字で済ますなど、薄礼な対応もみられる。このように勝家書状は秀勝書状よりも厚礼であることが確認される。したがって、勝家と秀勝は同輩ではなく、勝家は秀勝より下位であると評価できよう。以上のように書札札による分析からも両者の関係性を読み取ることができ、興味深い。

最後に本章の小括を述べたい。【史料四】に「内衆」とあるように秀勝には独自の家臣団が存在した。勝家はそのなかでも秀勝に近侍し、信貴城において秀勝のみならず、細川藤賢への取次ぎや財政管理、それらに伴う文書の発給などの実務を担っていた。いずれも対象は法隆寺であり、彼ら信貴城衆と法隆寺のあいだには密接な関係が構築されていたことがわかる。またこのような勝家の活動を見ると、信貴城内における山口氏の影響力の大きさも窺い知れるだろう。先述の通り、秀勝の知行地は東山内の福住郷一帯であるが、当主の秀勝をはじめ、勝家など一部の被官は、



信貴城に在城して松永氏の地域支配を担っていた。史料には直接現れないが、言うまでもなく福住郷一帯で実務に携わっていた秀勝被官も存在したのであろう。このような知行地（在地）との遊離性にも留意しなければならない。

なお知行地との遊離性に関しては、滝山城主時代の松永久秀と共通する。久秀は、摂津国滝山城を主君三好長慶から与えられるものの、自らは長慶の居住する芥川城に在城し、三好長逸とともに長慶への取次ぎ、及び三好家の政務を掌っていた。この問題については、今後、他の松永氏被官の事例と比較しながら検討する必要性がある。

## おわりに

本稿では、松永氏被官の山口秀勝について分析を試みた。繰り返しとなるが、本稿の内容をまとめておきたい。

山口秀勝は、松永氏麾下の大將として度々軍事行動に参陣し、最前線において戦い抜く武辺に優れる人物であった。松永氏軍勢力の中核を担う一人と言っても過言ではないだろう。その一方で、「信貴在城衆」として信貴城において政務を担い、それに伴う文書の発給を行った。特に【史料

九】は禁制に近い書状であり、禁制発給の面では、松永氏家中において、久秀・久通に次ぐ位置に秀勝がいたことがわかる。そして、法隆寺領における在地支配に関しても間接的に指示を与えることができる影響力を持つ一方、自らの裁量を超える案件に関しては、久秀へ取次ぐなど、重要事項に関する決定権を持ち得なかった。このような在り方は、同じ信貴在城の下代官部与介や加藤某とも共通する<sup>27</sup>。松永氏家中における久秀への集権制が窺い知れる。

また音信・贈答を通じて、法隆寺年預とのあいだには私的な人的関係を培っていた。

秀勝は、有力国人福住氏の闕所地を知行地として与えられ、独自に家臣団を形成し、久秀に奉公した。福住氏の領域は、大和国支配において等閑にできない要地であり、闕所の知行総高は定かではないが、大規模な領地であったと推定される。それまでの秀勝の働きぶりや久秀による信頼・期待が反映されている。

秀勝被官は、秀勝に近侍し、信貴城で諸事の取次ぎや財政管理を取り仕切る岡勝家をはじめ、史料からは断片的にしか見出せないが、知行地である福住郷一帯を管轄する者、または南都に居住する者もいたようである。このような久

秀からみたら陪臣クラスである彼らが松永氏による地域支配の根底を支えていたことは間違いない。

以上のように今回の分析を通じて、松永久秀被官山口秀勝の動向や役割・権力基盤、地域支配との関係性を明確にすることができた。

今後の課題としては、他の松永氏被官の動向を整理し、個別具体的に検討を加え、それぞれを比較することにより、松永氏被官構成及び家中の権力構造や基盤をあきらかにすることである。また被官と拠点城郭、地域支配との関係性など検討すべきことは多い。

## 付記

本稿を脱稿し、原稿を提出した後、日本史史料研究会発行の『戦国・織豊期の西国社会』が届けられた。そこで天野忠幸「松永久秀家臣団の形成」に接した。天野氏の優れた研究成果を本稿に反映できず、心苦しいばかりである。天野氏の論考と重複する箇所はあるものの、本稿は山口秀勝を軸とした分析に重点を置いたものであるため、論旨は異なる。天野論文は、松永家臣団の形成過程と全体像を検討したものであり、恐縮ながら拙稿とは相互補完の関係に

あると言えるだろう。

## 注

- (1) 今谷明『室町幕府解体過程の研究』（岩波書店、一九八五年）、天野忠幸『戦国期三好政権の研究』（清文堂出版、二〇一〇年）
- (2) 田中信司「松永久秀と京都政局」（『青山史学』二六号、二〇〇八年）、同「御供衆としての松永久秀―足利義輝三好享御成の分析から―」（『日本歴史』七二九号、二〇〇九年）。
- (3) 中川貴皓「足利義昭政権の研究―有力諸大名による連合政権論の提起―」（三重大学大学院人文社会科学研究所修士論文、二〇一二年）。
- (4) 安国陽子「戦国期大和の権力と在地構造―興福寺莊園支配の崩壊過程―」（『日本史研究』三四一号、一九九一年）、朝倉弘「奈良県史」十一卷（名著出版、一九九三年）、金松誠「松永久秀について」（『織豊系城郭の成立と大和』、二〇〇四年）、村井祐樹「松永弾正再考」（『遙かなる中世』一二号、二〇〇六年）、松永英也「永禄五年の徳政令にみる松永久秀の大和国支配」（『戦国史研究』五四号、二〇〇七年）、同「大和国支配期の松永久秀の相論裁許」（『戦国史研究』五九号、二〇一〇年）。
- (5) 松永英也「松永久秀家臣竹内秀勝について」（『戦国史研究』五一号、二〇〇六年）。
- (6) 天野忠幸「松永久秀を取り巻く人々と堺の文化」（『堺市博

物館研究報告』三二号、二〇一二年。

- (7) 天野忠幸「松永久秀と滝山城」(『歴史と神戸』二八九号、二〇一一年)。

- (8) 中川貴皓「木沢・松永権力の領域支配と大和信貴城」(『第二七回全国城郭研究者セミナー資料集』、二〇一〇年・同『中世城郭研究』二五号、二〇一一年)。

- (9) 文明年間には、大和国衆豊田氏の若党に山口姓の侍がいたことが確認される。『大乘院寺社雑事記』文明十一年十一月十一日・文明十五年十月八日条。

- (10) 四出井氏、海老名氏、竹内氏、赤塚氏、藤岡氏などが挙げられる。

- (11) 『言継卿記』永禄十二年閏五月廿日条。

- (12) いずれも「山口」、または「山口六郎四郎」と記されており、諱や官途等を確認することができないため、秀勝であることを確定できないが、史料を見る限り、秀勝のことを指している蓋然性が高く、活動時期も一致するため、検討対象とした。また注(9)の山口氏と異なることは確実である。豊田氏被官の山口氏は、史料上において、「豊田之(ノ)」という補助説明が常に記されているからである。ちなみに文明年間以降、この山口氏は諸史料に登場しない。

- (13) 注(3) 参照。

- (14) 三好長慶は、永禄三年(一五六〇)十一月に飯盛城へ入る。足利義輝御内書参照。

「伊勢貞助記」

到飯盛入城候由、彌可属静謐、珍重候、猶季治卿信孝晴  
舍可申也、

十一月廿四日

三好修理太夫どのへ

- (15) 大和国内における地域的名称。大和盆地を指す。

- (16) 「信長公記」巻五(二)。奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』(角川書店、一九九一年)。

- (17) 同右参照。

- (18) 『昭和資財帳八 法隆寺の至宝―古記録・古文書―』(小学館、一九九九年)。

- (19) 『多聞院日記』永禄十一年六月廿九日条、『細川両家記』永禄十一年六月廿九日条。

- (20) 『新校 群書類従』第六卷(名著出版、一九七八年)に所収。  
(21) 永青文庫蔵。

- (22) 『新校 群書類従』第六卷(名著出版、一九七八年)に所収。

- (23) 『史料十』参照。

- (24) 『史料十』『史料十二』参照。

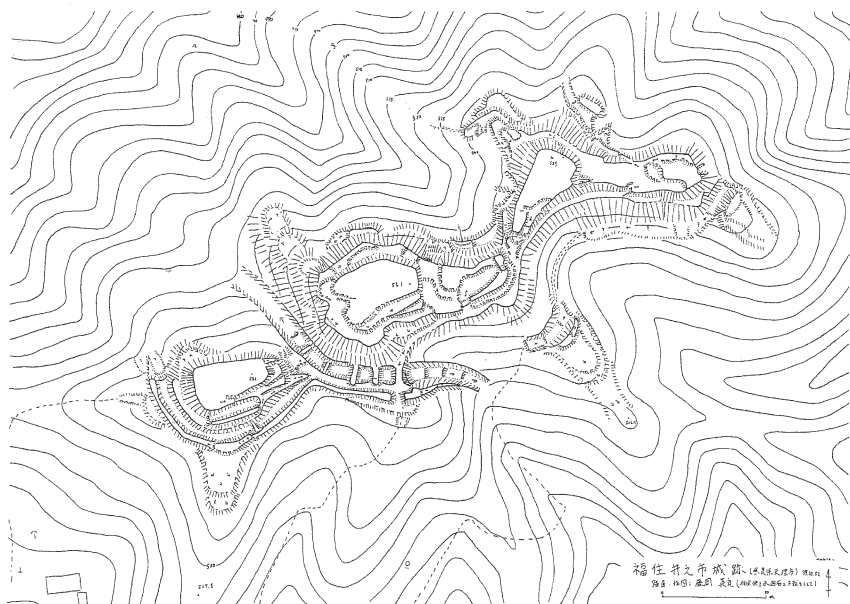
- (25) 『史料十二』参照。

- (26) 『史料十二』参照。

- (27) 注(8) 参照。



福住中定城縄張り図（中川貴皓作図）



福岡市文市城跡(通達後地理学) 藤岡英礼氏作図

# 松永氏被官発給文書目録

No.	文書名	年月日	差出(花押省略)	宛所	底本名	備考
1	安井宗運等連署書状	(永禄元年)4月15日	安法宗運・藤石直綱	宝厳院・観智院御房中	東寺百合文書	折紙
2	瓦林秀重等連署書状	(永禄5年)9月14日	瓦林左馬允秀重・喜多土佐守重政	東寺年預御中	東寺百合文書	折紙
3	松岡孝孝等連署書状案	永禄7年10月7日	松岡左近丞秀孝・海老名石見守家秀	吉村藤次郎殿	狩野亨吉氏蒐集文書	
4	松山□□等連署書状	永禄8年12月15日	松山□□・戸伏備後守親□・柴石豊後守□吉・松永彦一秀・喜多久左衛門定行	小平野庄	舊奥平野村所蔵古文書	
5	竹内秀勝等連署書状	永禄11年12月9日	竹内下総守秀勝・喜多土佐守重政	法隆寺年会御房	法隆寺文書	縦紙
6	結城忠正等連署書状写	(永禄12年)2月1日	結城山城守忠正・竹内下総守秀勝・柴田修理亮勝家・蜂屋兵庫助頼隆・野間左橋兵衛尉長前・森三左衛門尉可成・坂井右近尉政尚・佐久間右衛門尉信盛	天野山沙汰所御中	南行雜録	
7	竹内秀勝等連署書状	(永禄12年)2月16日	竹内下総守秀勝・柴田修理亮勝家・蜂屋兵庫助頼隆・野間左橋兵衛尉長前・森三左衛門尉可成・坂井右近尉政尚・佐久間右衛門尉信盛	本興寺役者御中	本興寺文書	
8	和田惟政等連署書状	(永禄12年)3月2日	和田伊賀守惟政・進齋忠正・竹内下総守秀勝・柴田修理亮勝家・蜂屋兵庫助頼隆・野間左橋兵衛尉長前・森三左衛門尉可成・坂井右近尉政尚・佐久間右衛門尉信盛	(上書)多田院役者御中	多田院文書	縦紙
9	河那部秀安等連署書状写	(元亀元年)4月26日	河那部伊豆守秀安・海老名石見守家秀	超昇寺左馬助殿御宿所	二条宴乗記	折紙
10	四出井家武等連署書状写	(元亀元年)10月19日	四手井下野守家武・瓦林左馬允秀重	成身院同御門徒御中	尋憲記	
11	瓦林秀重等連署書状写	(元亀元年)10月27日	瓦林左馬允秀重・四手井下野守家武	宗順坊・安藝守殿	尋憲記	
12	瓦林秀重等連署書状写	(元亀元年)10月29日	瓦林左馬允秀重・四手井下野守家武	成身院同御門徒衆御中	尋憲記	折紙
13	瓦林秀重等連署書状写	(元亀元年)12月6日	瓦林左馬允秀重・四手井下野守家武	宗順坊・安藝守殿御宿所	尋憲記	折紙
14	瓦林秀重等連署書状写	(元亀元年)12月8日	瓦林左馬允秀重・四手井下野守家武	宗順坊・安藝守殿御宿所	尋憲記	折紙



No.	文書名	年月日	差出(花押省略)	宛所	底本名	備考
15	瓦林秀重等連署書状写	(元龜元年)12月17日	瓦林左馬亮・好岡大炊頭	服部・椎木・田辺名主百姓中	二条宴乗記	折紙
16	瓦林秀重等連署書状写	(元龜元年)12月18日	瓦林左馬允秀重・四手井下野守家武	宗順坊・安藝守殿御宿所	尋憲記	折紙
17	四出井家武等連署書状	元龜3年1月30日	四出井下野守家武・林若狭守通勝・津越伯耆守満任	法隆寺年会御中	法隆寺文書	折紙
18	赤塚家清等連署書状	(元龜3年)2月25日	赤備家清・海老石家秀	目代衆御中	一乘院文書	
19	赤塚家清等連署書状	年末詳7月18日	赤塚山城守家清・楠河内守正虎	東大寺兩堂司御房中	宝珠院文書	折紙
20	赤塚家清等連署書状	年末詳9月11日	赤塚山城守家清・大喜多兵庫助清	松尾宮内大輔殿	東文書	折紙
21	赤塚家清等連署書状案	年末詳10月29日	家清・家保	茨木左衛門尉殿御中	醍醐寺文書	折紙
22	海老名家秀等連署書状	年末詳5月18日	海老名石見守家秀・河那部伊豆守秀安	嵯峨□□□□・所々百姓中	法輪寺文書	「任公方御下知之旨」
23	塩冶慶繼等連署書状	年末詳3月9日	塩冶慶・渡出重	法隆寺年会御房御中	法隆寺文書	折紙
24	塩冶慶繼等連署書状	年末詳4月15日	塩冶慶・佐肥通長	法隆寺年預御中	法隆寺文書	折紙
25	塩冶慶繼等連署書状	年末詳11月17日	塩冶彦岐守慶・渡辺出雲守重	法隆寺年会御房	法隆寺文書	折紙
26	楠正虎等連署書状	年末詳8月12日	楠河内守正虎・赤塚山城守家清	新禪院・金藏院・金樹院御同宿中	宝珠院文書	折紙
27	佐但辰親等連署書状	年末詳4月14日	佐但辰親・奥勘□・立勘弘・今甲秀政	法隆寺年会御坊御返報	法隆寺文書	折紙
28	信貴城足輕衆黒印状	年末詳9月12日	信貴城足輕衆	法隆寺年預御坊中	法隆寺文書	折紙
29	立入勘介弘□等連署書状	年末詳3月10日	立勘弘・入志重・横勘左勝長	法年御返報	法隆寺文書	折紙
30	立入勘介弘□等連署書状	年末詳6月7日	立勘弘・久日秀弘	椿藏院・知覚院・赤井坊・金剛院・西音院・覚□・法藏院(次第不同)各御中	法隆寺文書	折紙、案文カ
31	山崎久家等連署書状	年末詳5月24日	山崎久介久家・鳴森三兵衛尉吉久	法隆寺御寺中	法隆寺文書	横切紙
32	結城忠正等連署書状	年末詳11月23日	忠正・慶満	澤太菊殿御宿所	澤氏古文書	
33	横勘左勝長等連署書状	年末詳11月12日	横勘左勝長・立勘弘・入志重	法年參御返報	法隆寺文書	折紙
34	河伊等連署書状	年末詳11月27日	河那部秀安他カ	法隆寺年会御中	法隆寺文書	折紙 未確認
35	大喜多清書状	(弘治元年)10月28日	大喜多兵庫助清	宝蔵院まいる御返報	東寺百合文書	折紙
36	安井宗運書状	(弘治2年)6月16日	宗運	(上書)宝蔵院・觀智院まいる御同宿中	東寺百合文書	折紙
37	安井宗運書状	(弘治2年)6月23日	宗運	(上書)宝蔵院・觀智院まいる御同宿中	東寺百合文書	折紙
38	安井宗運書状	(弘治2年)6月25日	宗運	宝蔵院殿・觀智院殿まいる御同宿中	東寺百合文書	折紙

No.	文書名	年月日	差出(花押省略)	宛所	底本名	備考
39	安井宗運書状	(弘治2年) 6月29日	宗運	(上書)宝厳院・ 観智院まいる御 返報	東寺百合文 書	折紙
40	安井宗運書状	(弘治2年) 7月8日	安井宗運	宝厳院・観智院 まいる御返報	東寺百合文 書	折紙
41	安井宗運書状	(弘治2年) 7月9日	安井宗運	宝厳院御返報	東寺百合文 書	折紙
42	安井宗運書状	(弘治2年) 7月10日	安法宗運	宝厳院御返報	東寺百合文 書	折紙
43	竹内秀勝書状	(弘治2年) 7月20日	秀勝	(切封)片源御宿 所	石清水文書	
44	安井宗運書状	(永祿元年) 4月5日	宗運	宝厳院まいる御 返報	東寺百合文 書	切紙、封紙 上書
45	安井宗運書状	(永祿元年) 4月7日	宗運	(上書)東寺年預 御房御同宿中	東寺百合文 書	折紙
46	安井宗運書状	(永祿元年) 4月15日	宗運	(上書)宝厳院・ 観智院まいる御 返報	東寺百合文 書	折紙
47	四出井家保書状	(永祿元年) 閏6月18日	四手井左衛門尉家 保	東寺年預御房御 中	東寺百合文 書	折紙
48	某季信書状	(永祿3年) 3月4日	季信	賀茂一社中	賀茂別雷神 社文書	切紙
49	河合元継書状案	(永祿3年) 4月11日	河合与左衛門尉元 継	竹内三位殿ま いる御報	賀茂別雷神 社文書	折紙
50	河合元継書状	(永祿3年) 4月12日	河合与左衛門尉元 継	岡本左衛門尉殿 御宿所	賀茂別雷神 社文書	折紙
51	四出井家保書状 案	(永祿4年) 11月16日	四手左	今紀まいる	醍醐寺文書	
52	瓦林秀重書状	(永祿5年) 7月28日	瓦林左馬允秀重	供目代御坊中	春日大社文 書	折紙
53	塩冶慶継書状写	永祿5年 11月13日	塩冶壱岐守	西大寺長老房御 同宿中	西大寺旧記	
54	楠正虎書状	(永祿6年) 6月28日	楠河内守正虎	妙満寺	妙顕寺旧蔵 文書	
55	楠正虎書状	(永祿6年) 7月5日	正虎	妙満寺	妙顕寺旧蔵 文書	
56	河那部秀安書状	(永祿6年) 9月20日	秀安	(切封)山入 御 返報	賀茂別雷神 社文書	折紙
57	河那部秀安書状	(永祿6年) 9月20日	秀安	(切封)大森□□ まいる御返報	賀茂別雷神 社文書	折紙
58	楠正元書状案	(永祿6年) 9月26日	楠河内守正元	市原野惣中	賀茂別雷神 社文書	切折紙
59	赤塚家清書状案	(永祿6年) 後12月20日	赤塚山城守家清	長松軒まいる御 宿所	賀茂別雷神 社文書	折紙
60	赤塚家清書状	(永祿6年) 後12月20日	赤塚山城守家清	藤木式部少輔 殿・藤木左衛門 大夫殿御宿所	賀茂別雷神 社文書	折紙
61	向井専弘書状案	(永祿7年) 6月19日	向備専弘	塩壱御返報	東寺百合文 書	折紙、端裏 書に「永祿 七」
62	渡辺出雲守重□ 書状	永祿7年 6月26日	渡出□□	五百井在所中	五百井・大 方保家文書	
63	渡辺出雲守重□ 書状	(永祿8年) 5月11日	出□□	戸嶋与二郎との へ	五百井・大 方保家文書	
64	岡勝家書状	(永祿11年) 5月21日	岡大勝家	法隆寺年会御報	法隆寺文書	折紙

No.	文書名	年月日	差出(花押省略)	宛所	底本名	備考
65	竹内秀勝書状	(永祿11年) 11月27日	竹下秀勝	年預御坊御返事	法隆寺文書	
66	河那部秀安書状 写	(永祿12年) 10月24日	河伊秀安	藤与・樋御宿所	二条宴乗記	折紙
67	四出井家武書状 写	(元亀元年) 8月21日	家武	竹乗御宿所	尋憲記	
68	四出井家武書状 写	(元亀元年) 8月24日	家武	竹乗	尋憲記	
69	四出井家武書状 写	(元亀元年) 9月3日	四手下家武	南院	尋憲記	折紙
70	四出井家武書状 写	(元亀元年) 9月3日	家武	竹乗御返報	尋憲記	
71	四出井家武書状 写	(元亀元年) 9月3日	下つけの守より	(上書)御ちの人	尋憲記	
72	四出井家武書状 写	(元亀元年) 10月12日	家武	竹乗御宿所	尋憲記	
73	竹内秀勝書状写	(元亀元年) 10月15日	秀勝	(上書)四手下御 陣所	尋憲記	
74	四出井家武書状 写	(元亀元年) 10月16日	家武	(上書)竹下御返 報	尋憲記	
75	四出井家武書状 写	(元亀元年) 10月16日	家武	(上書)竹乗御返 報	尋憲記	
76	四出井家武書状 写	(元亀元年) 10月19日	家武	(上書)南院・竹 乗	尋憲記	
77	四出井家武書状 写	(元亀元年) 10月24日	家武	成身院御同宿中	尋憲記	
78	四出井家武書状 写	(元亀元年) 10月26日	家武	竹乗御宿所	尋憲記	花押の変化 あり。「判 初而カワリ 候」
79	四出井家武書状 写	(元亀元年) 10月27日	四手下家武	宗順坊座下	尋憲記	
80	四出井家武書状 写	(元亀元年) 10月27日	四手下家武	成身院御同宿中	尋憲記	
81	四出井家武書状 写	(元亀元年) 10月27日	家武	南院・乗閑	尋憲記	
82	四出井家武書状 写	(元亀元年) 11月3日	四手下家武	成身院御返報	尋憲記	
83	四出井家武書状 写	(元亀元年) 11月5日	四手下家武	成身院御同宿中	尋憲記	
84	四出井家武書状 写	(元亀元年) 11月8日	四手下家武	成身院御同宿中	尋憲記	折紙
85	四出井家武書状 写	(元亀元年) 11月11日カ	(上書)四手下	(上書)竹乗御宿 所	尋憲記	
86	四出井家武書状 写	(元亀元年) 11月11日	四手下家武	成身院御同宿中	尋憲記	折紙
87	四出井家武書状 写	(元亀元年) 11月20日	四手下家武	成身院御同宿中	尋憲記	
88	四出井家武書状 写	(元亀元年) 12月10日	家武	南院・竹乗御返 報	尋憲記	
89	四出井家武書状 写	(元亀元年) 12月18日	四手井下野守家武	宗順坊・安藝守 殿御宿所	尋憲記	
90	松永秀長書状写	(元亀2年) 5月1日	松兵太秀長	四出下	尋憲記	
91	四出井家武書状 写	(元亀2年) 5月9日	四出下家武	寛舜坊	尋憲記	

No.	文書名	年月日	差出(花押省略)	宛所	底本名	備考
92	渡辺出雲守重□書状写	(元亀2年)5月14日	渡出	四出下御返報	尋憲記	折紙
93	四出井家武書状写	(元亀3年)壬1月27日	四出下家武	福智院・多聞院御返報	尋憲記	折紙
94	四出井家保書状写	(元亀4年)1月3日	家保	市原兵庫助殿・寛舜御房御返報	尋憲記	
95	四出井家保書状写	(元亀4年)1月7日	四手井美作守家保	好太	尋憲記	
96	四出井家保書状写	(元亀4年)1月20日	家保	好太	尋憲記	
97	赤塚家清書状	年末詳 10月23日	家清	片岡治部丞殿御返報	石清水文書	
98	塩冶慶繼書状	年末詳 2月21日	塩冶慶	法隆寺年預御坊御中	法隆寺文書	折紙
99	大喜多清書状	年末詳 7月17日	大北兵庫助清	年預御中	東寺百合文書	折紙
100	大喜多清書状	年末詳 7月27日	大喜多兵庫助清	東寺年預御返報	東寺百合文書	折紙
101	大喜多清書状	年末詳 9月8日	大兵清	金剛院御同宿中	法隆寺文書	切紙続紙
102	岡勝家書状	年末詳 4月3日	岡大介勝家	法隆寺年会	法隆寺文書	折紙
103	岡勝家書状	年末詳 12月晦日	岡大介勝家	法年御坊參御同宿中	法隆寺文書	折紙
104	河那部高安書状	年末詳 12月20日	河那部主水佑高安	大外記殿參御報	壬生家文書	折紙
105	瓦林秀重書状	年末詳 10月18日	瓦左秀重	宝光院參御同宿中	法隆寺文書	折紙
106	楠正虎書状	年末詳 5月10日	楠河内守正虎	西京薬師寺御役者中	薬師寺文書	折紙
107	楠正虎書状	年末詳 7月27日	楠河内守正虎	成就院	成就院文書	折紙
108	楠正虎書状	年末詳 8月18日	楠河内守正虎	清水寺成就院	成就院文書	折紙
109	楠正虎書状	年末詳 9月18日	楠河内守正虎	奥田勘兵衛殿御宿所	下関市立長府博物館所藏文書	
110	楠正虎書状	年末詳月日		楠彈左	旧武家手鑑	未確認
111	喜多重政書状	年末詳 2月10日	喜多土佐守重政	椿首座床下	大徳寺文書	切紙
112	佐喜宮通長書状	年末詳 8月13日	佐喜宮又左衛門尉通長	法隆寺年預御中	法隆寺文書	折紙
113	四出井家綱書状	年末詳 5月27日	四手井伊賀守家綱	山上年預御房御返報	田中本古文書	折紙
114	四出井家綱書状案	年末詳 11月11日	四手伊家綱	□□御房御返報	田中本古文書	堅紙
115	四出井家保書状	年末詳 11月6日	四手井左衛門尉家保	本間源五郎殿御返報	随心院文書	折紙、永禄3～11
116	勝雲斎周椿書状	年末詳 9月8日	勝雲周椿	法隆寺年預御中	法隆寺文書	切紙続紙
117	勝雲斎周椿書状	年末詳 9月10日	勝雲斎周椿	法隆寺年預御中	法隆寺文書	折紙
118	勝雲斎周椿書状	年末詳 9月11日	勝雲周椿	法隆寺年預御中	法隆寺文書	折紙
119	勝雲斎周椿書状	年末詳 9月18日	勝雲斎周椿	法隆寺年会御坊尊報	法隆寺文書	折紙

No.	文書名	年月日	差出(花押省略)	宛所	底本名	備考
120	勝雲斎周椿書状	年末詳 9月22日	勝雲斎周椿	法隆寺年預御中	法隆寺文書	折紙
121	勝雲斎周椿書状	年末詳 9月22日	周椿	(上書)渡出尊報	法隆寺文書	折紙
122	勝雲斎周椿書状	年末詳 9月28日	周椿	(上書)宝光院御坊	法隆寺文書	折紙
123	勝雲斎周椿書状	年末詳 9月28日	勝雲斎周椿	法隆寺年会御坊	法隆寺文書	折紙
124	勝雲斎周椿書状	年末詳 10月24日	勝雲斎周椿	法隆寺年預御中	法隆寺文書	折紙
125	勝雲斎周椿書状	年末詳 11月10日	勝雲周椿	法隆寺年預中	法隆寺文書	折紙
126	勝雲斎周椿書状	年末詳 12月23日	勝雲斎周椿	宝光院御同宿中	法隆寺文書	折紙
127	竹内秀勝書状	年末詳 3月12日	竹下秀勝	紹鉄	慈照院文書	折紙
128	竹内秀勝書状	年末詳 5月12日	秀勝	宝光院・仙覚坊	法隆寺文書	折紙
129	竹内秀勝書状	年末詳 5月28日	竹加兵秀勝	八幡田中殿にて 宮内卿殿御返報	石清水文書	
130	竹内秀勝書状	年末詳 6月3日	竹下秀勝	明識房	額安寺文書	折紙
131	竹内秀勝書状	年末詳 6月5日	竹下秀勝	明識房	額安寺文書	折紙
132	竹内秀勝書状	年末詳 6月14日	竹内加兵衛尉秀勝	宝光院	法隆寺文書	折紙 永禄 10カ
133	竹内秀勝書状	年末詳 7月13日	秀勝	明識坊	額安寺文書	折紙
134	竹内秀勝書状	年末詳 8月23日	秀勝	蜷川道西入道殿 御宿所	蜷川家文書	折紙
135	竹内秀勝書状	年末詳 11月11日	竹加兵衛	柳法	勸修寺文書	折紙
136	竹内秀勝書状	年末詳 11月17日	秀勝	進作御宿所	田中教忠氏 所藏文書	折紙
137	竹内秀勝書状写	年末詳 12月7日	竹加兵秀勝	多左太 御宿所	石清水文書	
138	竹内秀勝書状	年末詳 12月26日	秀勝	片岡殿	石清水文書	
139	立入勘介弘□書 状	年末詳 4月7日	弘	珍藏院御同宿中	法隆寺文書	折紙
140	立入勘介弘□書 状	年末詳 9月6日	立勘弘	法年御□	法隆寺文書	折紙
141	藤岡直綱書状	年末詳 10月17日	直綱	法隆寺年預御坊 貴報	法隆寺文書	横切紙
142	松山重治書状	年末詳 6月21日	松山新介重	法立寺中床下	法隆寺文書	折紙
143	松山重治書状	年末詳 6月21日	松山新介重	西王院床下	法隆寺文書	折紙
144	安井宗運書状	年末詳 5月8日	宗運	(上書)観□院・ 宝□院まいる御 同宿中	東寺百合文 書	折紙、宛所 は観智院・ 宝蔵院カ
145	安井宗運書状	年末詳 5月27日	宗運	宝蔵院・観智院 まいる貴報	東寺百合文 書	折紙
146	山口秀勝書状	年末詳 1月11日	山口秀勝	法隆寺年会参御 返報	法隆寺文書	折紙
147	山口秀勝書状	年末詳 4月14日	山口秀勝	法隆寺沙汰衆中	法隆寺文書	折紙

No.	文書名	年月日	差出(花押省略)	宛所	底本名	備考
148	山口秀勝書状	年末詳 4月25日	山口秀勝	法隆寺年会衆中 御返報	法隆寺文書	折紙
149	信貴在城衆秀勝 書状	年末詳 5月3日	信貴在城衆秀勝	法隆寺年会御房 御返報	法隆寺文書	折紙、永禄4 ～11
150	山口秀勝書状	年末詳 10月23日	秀	年会參御返報	法隆寺文書	折紙
151	横勘左勝長書状	年末詳 10月4日	横勘左勝長	法年參御返報	法隆寺文書	折紙
152	渡辺出雲守重□ 書状	年末詳 1月25日	渡辺出雲守重	瑞峯院納所禪師	田中教忠氏 所藏文書	折紙
153	渡辺出雲守重□ 書状	年末詳 5月1日	渡辺出雲守重	法隆寺年会御房 床下	法隆寺文書	折紙
154	渡辺出雲守重□ 書状	年末詳 9月16日	渡辺出雲守景行	修理目代御房・ 会所目代御房・ 宮目代御房・返 目代御房	一乗院文書	折紙

\*本目録作成に際し、東京大学史料編纂所日本古文書ユニオンカタログを参照した。

\*目録は、連署と単独に分け、発給年次順とし、年末詳のものは被官ごとに月日順でまとめた。

\*被官の人名比定に関しては、古記録や文書内から検討し、確実視できるもののみを取り上げた。文書番号6、7、8の3通は、竹内秀勝・結城忠正の両名が松永氏被官であり、その他は、足利義昭・三好義継・織田信長被官である。

\*今村慶満・中村高統は位置付けが難しいため、保留とする。今後の課題としたい。

\*天野忠幸氏より御教示を得た。



# 近世京都における寺院町の運営と捨子

林 宏 俊

## はじめに

近年さかんに行われている近世都市史研究は、都市全体を一円的に把握するのではなく、都市を分節化し、それを具体的かつ詳細に分析する手法が多くみられる。<sup>①</sup>近世都市の大多数は城下町であり、そこは武家地・寺社地・町人地を主要な構成要素とする分節的構造をなすとされているのである。<sup>②</sup>そして、社会構造と空間構造は不可分なものとして分析し、都市社会の一部を「寺院社会」として構造化している。また物質的労働と精神的労働の分業という論点の中で、城下町に凝縮される都市的要素の一つに宗教的要素を挙げ、それは都市の凝縮核の一つであるという。巨大城下町である江戸の浅草寺とその周辺社会において、浅草寺

の寺中子院に「世俗化」と「私欲の論理」が見いだされているのである。<sup>③</sup>

浅草寺のような大規模寺院は「寺院社会」を形成している点で重要であるが、近世城下町に多数存在した中小規模の寺院についても研究が不可欠であるとの視角から、巨大城下町江戸の寺院町の寺院の研究も行われつつある。<sup>④</sup>

翻って、近世京都研究は「町」を基礎とする秋山國三氏の研究が先駆的かつ基礎的な位置を占めている。<sup>⑤</sup>近世社会において、「町」は村と並んで近世社会における最も基本的な社会集団で、近世都市における支配や自治の基礎単位であったという。「町」は道路をはさんだ両側に店を出す町屋の住民によって構成される共同体であり、住民は互いに商売をしていくうえでの資本や信用を保証しあう共同体